

図7：エディプス・コンプレックスの諸段階

*L
(図6)

*1
幻想の形成は、下記のように行われる。

前象徴界への参入

*2 まず、
幼児期において予期されない体験としての対象aが顕現した際に、
養育者がそれを繰り返し解決するという前段階がある。

↓
*3 その段階において、
養育者は対象aの解消と結びつけて認識される。

↓
*4 養育者は様々な感覚的特徴を持ち、
また様々な働きかけを幼児に対して繰り返し行う。

↓
*5 養育者の現前と養育者の様々な働きかけは、
幼児の脳の中で
対象aの解消（＝満足）と
結びついたシニフィアンとして
蓄積されていく。

↓
*6 そうして形成されるシニフィアンの体系が
「大他者（＝A）（＝『（精神的分析的）母』）」
として前象徴界を形成する（＝「前エディプス期」）。

エディプス第一の時 (= 「前エディプス期」)

- *7 しかし、大他者は以下の二点で対象aを十全に解消することはない。
- ・シニフィアンは体験との予測誤差をゼロにすることはない
 - ・養育者は現前と不在を繰り返し、幼児を不安にさせる
- 上記二点が「大他者の非一貫性 (= Δ)」を形成する (= 「不満」)。

- *8 そこで、幼児は
「大他者を一貫したものにする要素
(= 「ファルス」)」を探し求める。

- *9 このとき、幼児にとってファルスは
「自分が『それ』になることができるかもしれないもの」
としての「想像的ファルス」として現れている。

エディプス第二の時

- *10 エディプス第一の時において、養育者が
「養育者の現前と不在を司る対象
(= 「(精神的) 父」)」を
シニフィアンとして幼児に示すとき、
幼児は「父」を用いた幻想の構築を開始する。

- *11 父が父として幼児に作用するためには、
父は幼児の前に現前するものから
超越していなければならないため、
父は幼児の前に現前してはならない。

- *12 まず、幼児は父を
「大他者からファルスを『剥奪』した『想像的父』」
として解釈するようになる。

エディプス第三の時

*13 しかし、このとき父は「ファルスを持つ者」としても現れている。
その側面を受容するとき、幼児はファルスの存在を
ファルスが現前しない状況のまま信じられるようになるので、
幼児は**大他者の非一貫性を大他者の本質として**
認められるようになる（＝大他者の「去勢」を受け入れる）
（＝ $S(A)$ ）。

*15 父がファルスを持つと解釈されるとき、
→ 父は**超越的な「法」によって**
大他者を統御する者と解釈されるようになる。

*14 幼児に大他者の去勢を
認めさせる者としての父を
「**現実的父**」と呼ぶ。

*16 このような父を
「**象徴的父（＝『父の名』）**」と呼ぶ。

*17 父が持つ法の根拠としてのファルスは
「**象徴的ファルス**」と呼ばれる。

*18 これは、幼児が**自身の対象a**について
「父および父の持つファルスを用いることで
究極的には解決可能なものである」と
解釈できるようになることと等価である。

*20 現実的父に同一化し、
自身も象徴的ファルスを父のように
持とうとする主体を
「**（精神分析的）男**」という。

*21 象徴的ファルスに同一化し、
ファルスを持つ現実的父に欲望されることで
ファルスを間接的に持とうとする主体を
「**（精神分析的）女**」という。

*19 そこから、主体は**対象a**を解消するために
自身もファルスを持つことを「**欲望**」するようになる
（＝「**欲望の主体**」の誕生）。

*M
(図8)